

「実践事例集Vol.15」(2018年4月発行)で  
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト  
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>



おたまじゃくしって  
どうやってカエルになるの？



実践対象年齢：5歳児  
実践期間：7月3日～8月18日

学校法人 押野学園 認定こども園せんだい幼稚園

## 1. 科学する心を育てるとは

3歳から5歳にかけては話し言葉の基礎が築き上げられ、物事への興味や好奇心から「なんで？」「どうして？」と保育者に尋ねる機会も増えてくる。それらの疑問に対して、「〇〇なんだよ」と保育者が答えると、「あ、そうか！」と納得したような顔を見せることもあれば、なおさら謎が深まったように「じゃあ、これはなぜ？」と畳みかけるように質問することもある。子供達は、単に人から「〇〇だから□□なんだよ」と教えられることだけではなく、自分の目で見て、耳で聞き、肌で触れ、心で感じることで一層の理解や知識を深めているように感じる。新たに出逢った未知の事象でも、既に知っている知識や規則性と関連付けることにより、物事には一定の規則性があつたり、一見異なる事象同士にも関連性があることを見つけたりし、自らの目や耳、肌、心から得た経験により自身を取り囲む世界を少しずつ理解していく。

本園では「なぜなんだろう？」「どうしてこうなるんだろう？」と思う体験こそが科学する心への入り口であると捉え、自身が予期していたことと違う結果が生じたり、思いもしなかったようなことが起きて驚いたり、わくわくしたりといった経験を大事にしたいと考えている。また、そのような事象に対し、単に正解を保育者が教えてあげるのではなく、子供達が自分の知っている知識の中からなんとか説明しようという気持ちやこのようにすればこういう結果が起きるのではないかと考え、そして何よりも自分自身で試してみる機会こそが、科学する心を育むきっかけになるのではないかと考えている。

今回の事例は平成28年度に応募した「科学する心を育てる コオロギの飼育を通して～子供達が科学する心を育むプロセスと保育者の援助についての検討～」に「今後の計画・方向性」として示した「科学する心を育むプロセスを循環させていくために有効であったと感じた教師の具体的な支援内容（以下支援内容）」を意識的に取り入れ、取り組んできた。本事例の中でその「支援内容」を踏まえて取り組んだ箇所にはP2の通り支援①～支援④の記号を付け、そのことについての考察もあわせて記載する。

（中略）

### 3. 本園での取り組み事例

7月3日

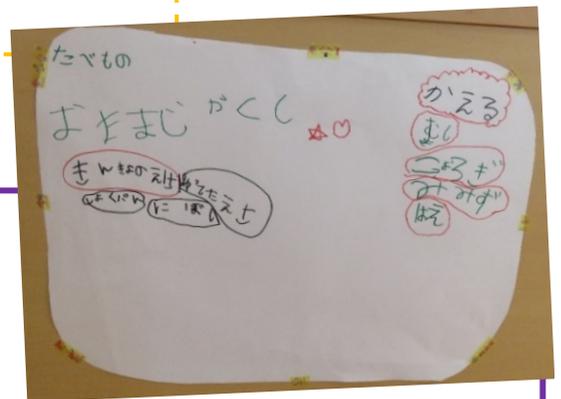
#### 【場面1-1 「元気なおたまじゃくし発見」】

な～もの森（3ページ参照）の田んぼで年長児が沢山のおたまじゃくしがいることに気付き、砂場道具（スコップやバケツ）で捕まえて遊んでいた。A君が「おたまじゃくしってどうやってカエルになるんだろうね」と疑問に感じたことから、クラスでおたまじゃくしを育てることになった。

まず育てる前におたまじゃくしについて調べることになり、園にある図鑑を見たり、家に帰り親に聞く子もいた。子供達だけで話し合いが始まり、途中で「先生紙下さい」とB君が言ってきた。調べたことを忘れないように紙に書くということだった。何を食べるのか、どんな所に住んでいて、どんなお家を作ってあげれば良いのかを紙に書きそれを廊下に掲示することになった。掲示することで周りの子や、年少児の子もおたまじゃくしに興味を惹かれるようになった。

（波線部はP2に記載の「支援内容」に基づいた実践を示す）

【環境、保育の援助】  
虫かごはいつでも使えるようにクラスに常備していた。



#### 支援内容に基づいた実践に関する考察

●家に帰り親に聞く子もいた。 ➡

支援④

おたまじゃくしについて家で母親もしくは父親に聞いたという子がいた。またこのことがきっかけで家でおたまじゃくしを飼うことになった家庭もあった。家で調べることが結果家庭での会話の1つになり、コミュニケーションを多くとれるようになってきた。

●何を食べるのか、どんな所に住んでいて、どんなお家を作ってあげれば良いのかを紙に書きそれを廊下に掲示することになった ➡

支援①

子供達と話し合いをする時教師はホワイトボードに子供達からの意見を書き出している。そのことを思い出しB君は紙に書きだしたのではないだろうか。書く事で調べていることを明確にし意見が重複しないようにしていた。そしてその場で話が終わるのではなく廊下に掲示していることで、継続して情報を共有することができていた。

●虫かごはいつでも使えるようにクラスに常備していた ➡

支援②

6月末頃からな～もの森で昆虫を探すことを楽しんでいる姿が見られた。そのため虫かごをクラスに常備した。子供達から育てたいという思いが出てくるようになった。

7月10日

【場面 1-2 「なもあみだぶつ」】

調べたことをもとに虫かごに土と水、石を入れておたまじゃくしの家を作った。おたまじゃくしを育てて1週間が過ぎた頃、毎日おたまじゃくしを観察していたA君が一匹死んでいることに気付いた。そのおたまじゃくしはただ死んでいたのではなく誰かにつぶされて死んでいた。死んでしまったおたまじゃくしをどうするか教師と子供達で話し合い、な～もの森にお墓を作ってあげることになった。A君はたまたま年少児がおたまじゃくしを触っているのを見て「誰かが触って死んじゃったのかも」と言いそれを聞いたC君は「触らないようにしましょう」と紙に「見るだけだよ」とメッセージを書き、貼り紙を作った。また年少児が触っていないか虫かごを注意深く見るようになった。それ以降おたまじゃくしが死ぬことはなくなってきている。

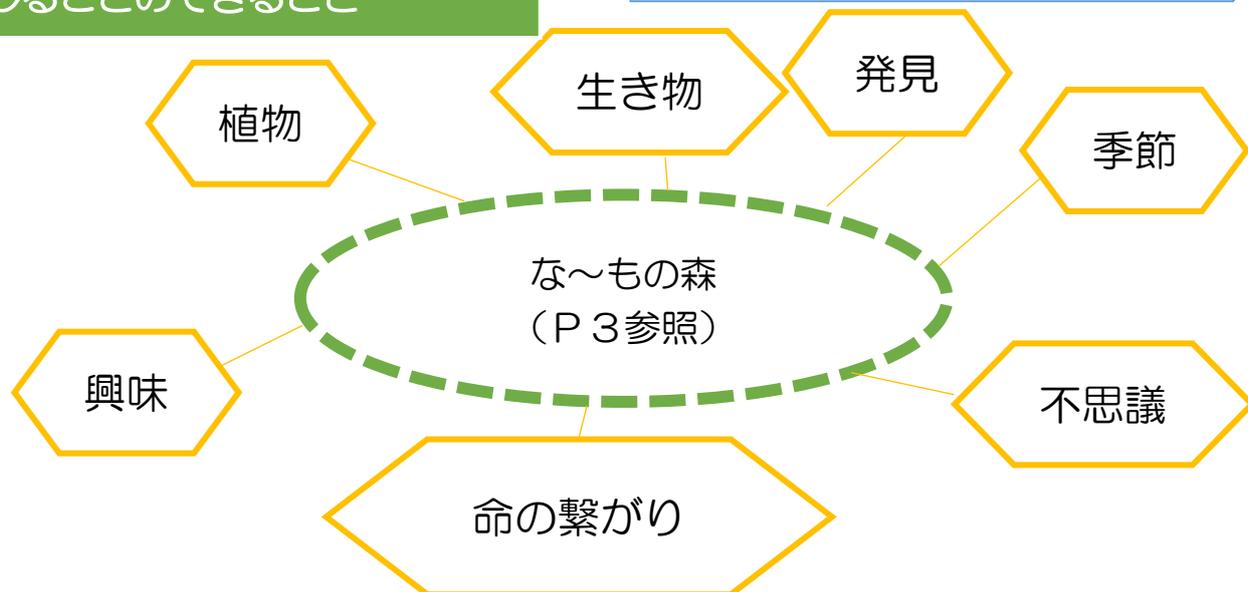


ゆっくり  
寝んねしてね・・・

考察

- ・A君は元々昆虫が好きだったこともあり、昆虫についての疑問も多く持っていた。A君を中心に昆虫の興味が広まっていき、女兒も関心を向けるようになったのではないと思われる。
- ・以前幼虫を育てていた時は死んでしまってもあまり悲しい表情もなかったが、今回はお墓まで作っていた。実際目に見えて動きがある分、興味が続き、また少しずつではあるが変化があることで愛着が芽生えたのではないだろうか。

な～もの森（自然）で遊ぶことで  
感じるこのことができること



7月11日～7月14日

【場面2】「おたまじゃくしもお腹空いてるよね」

・おたまじゃくしにどんな餌をあげるか、どれくらいの頻度であげるかは子供達に委ねており、気付いた子が葉っぱやご飯粒をあげている状況だった。

給食を食べ終わったA君がおたまじゃくしを見て「お腹空いてるよね」とおたまじゃくしに話し掛けていた。

翌日 A 君は朝食食べた食パンを少し残し園に持ってきておたまじゃくしにあげていた。おたまじゃくしが食パンを食べることは以前他の子が図鑑で調べそれを紙に書き掲示して見て知っていたようだ。

《保育者の気付き》

子供達の中で家から何かを持ってくるという子はいなかった。そんな中、A君はおたまじゃくしの餌がなくて可哀想という気持ちと、掲示されていた情報が本当なのか疑問に感じたため家からパンを持ってくるという行動をとったと考えられる。

【振り返り】

身近な環境に進んで関わり自分がやらなきゃという使命感を覚え、自分で考えて行動することで自立心が育ち、A君はこの経験を機に自信を持って行動するようになった。

【環境、保育の援助】

A 君はパンを持ってきて良いか尋ねてきたので保護者にその経緯を話し、A 君の思いを尊重できるよう配慮した。

食パン食べて大きくなってね！

でも本当に食パンを食べるのかなあ？

支援内容に基づいた実践に関する考察

●おたまじゃくしが食パンを食べることは以前他の子が図鑑で調べそれを紙に書き掲示して見て知っていたようだ。 ➡ 支援③

何を食べるのかというのが掲示されていることにより子供達同士で情報が共有でき、A君の関心はさらに深まっていった。

●A 君はパンを持ってきて良いか尋ねてきたので保護者にその経緯を話し、A 君の思いを尊重できるよう配慮した。 ➡ 支援④

園内にもパンはあったが、あえて提供せず、家庭から持って持参できるようお願いをした。保護者が今子供が生き物(おたまじゃくし)に興味を持っているのだと知ることができ、子供の関心事を園と家庭が共有する事で興味や疑問、好奇心を一層に広げられると考えた。

- ・餌をあげたあと他の子も興味を持って集まり、観察をしていた。そしておたまじゃくしが食パンを食べると子供達は大喜びしていた。
- ・実践後食パンを家から持ってくる子が増えてきた。

《教師の気付き》

A君が食パンをあげる姿を見て、他の子も興味も持って観察を始めた。一人の疑問が周りに感染するようにみんなの疑問へと変わっていく様子を感じた。

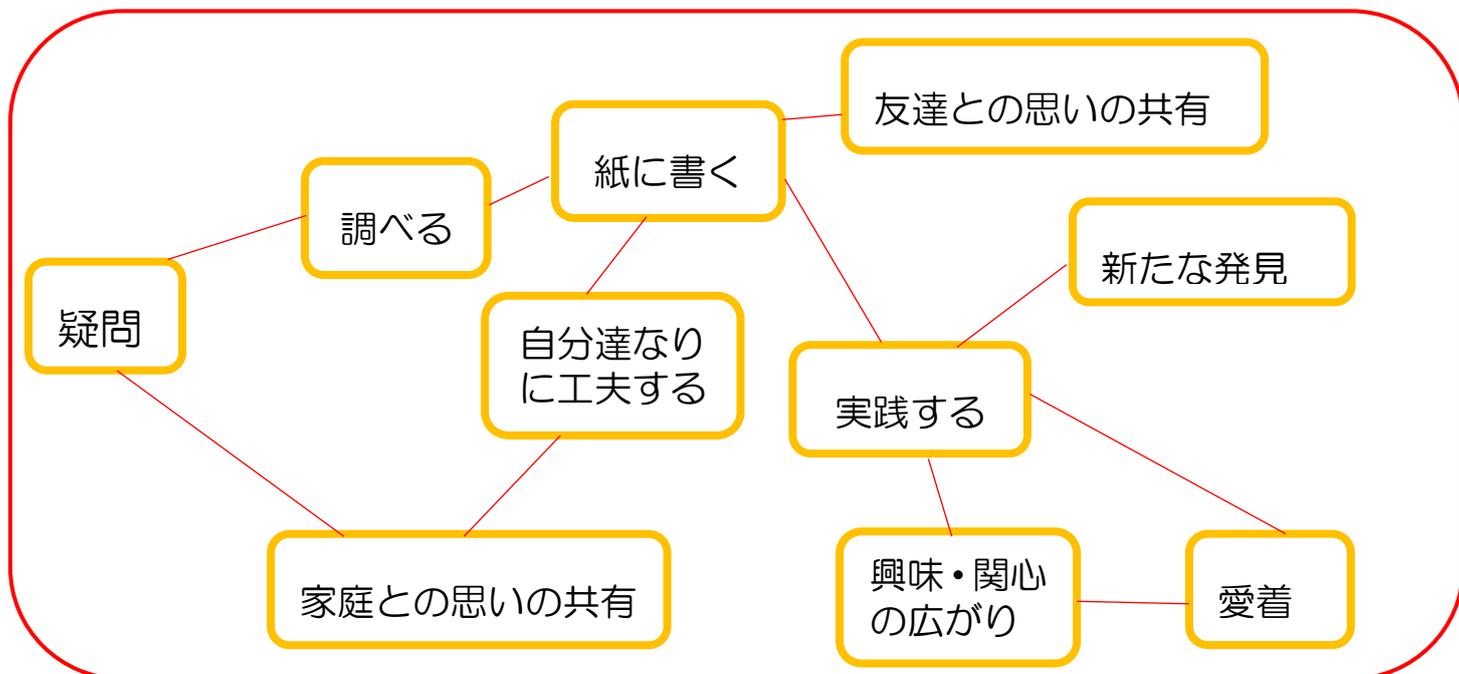
考察

調べたことを実践することは以前（おたまじゃくしの部屋作りの時）も見られたが、疑問に感じたことを自分達で考え実践するという姿は今回初めて見られた。今までやってみようという気持ちに心のどこかで歯止めを利かせていた子供達が今回実践に至ったのは、育てる中でおたまじゃくしを思う気持ち（愛着）が強くなってきたからではないだろうか。生き物には命があり、命あるものは大切にしようという気持ちが育まれてきているように感じた。また疑問が確信に変わった時、子供達は知る楽しさを味わい、科学する心に大きな変化を表した瞬間だった。

食パン好きなんだね♪



本当に食べてるよ!!



科学する心が育まれている瞬間

7月20日

【場面3「部屋を綺麗にしよう」】

・B君は登園後、いつものようにおたまじゃくしを観察していた。

B君「今日も元気に泳いでるね！でもなんか前よりおたまじゃくしが見えにくくなってきてる...」

その後Cさんが来てB君と話をしている様子が見られた。

B君「Cちゃん見て！おたまじゃくしが見えなくなってきたよ」

Cさん「水が汚れてるんだよ。ご飯（ご飯粒や食パン）を入れたりしてるから汚れてきたのかも」

・水が汚れてきているということには気付いたが、水を替えて綺麗にしようという気持ちにまで至らなかったため、教師は子供達に自分達の部屋が汚かったらどんな気持ちになるか、おたまじゃくしの状況を自分達と重ねられるよう話をした。

B君「汚い部屋だと死んじゃうかもしれない！僕達で綺麗にあげよう」

・B君は水をとるうちにおたまじゃくしまですくってしまうことに気が付いた。それを見たCさんが赤いバケツを持ってきて、B君と水すくいを交代した。

Cさん「おたまじゃくしはこのバケツに避難させよう」

B君「それいい考えだね！」

【振り返り】

今回は死んで欲しくないという私の思いがあり左記のような話を子供達にした。子供と教師の思いが重なることは難しいが、共有することはできる。また子供達が教師の思いを共有しようとする姿もあるのだと気付いた。子供達なりに教師の思いを受け入れたからこそB君の部屋を綺麗にしてあげようという発言がでたのではないだろうか。



水も替えて綺麗にあげよう！

水がすごく汚れてるよ

【環境、保育の援助】

部屋を綺麗にすると決まった時点で、綺麗にするために使えそうなバケツやスポイトなどを子供達の近くに揃えておいた。

まず汚い水を捨てよう！

《教師の気づき》

「おたまじゃくしの部屋を綺麗にする」という目的は共有しているが、具体的にどうやって綺麗にするかはイメージしづらいと思ったため、いくつかの道具を教師が準備した。道具を見たことで綺麗にするための具体的な方法をイメージし子供達同士で共有できたようだった。

支援内容に基づいた実践に関する考察

●部屋を綺麗にすると決まった時点で、綺麗にするために使えそうなバケツやスポイトなどを子供たちの近くに揃えておいた。➡ 支援②

バケツなどを準備したことで具体的にどうするのかイメージを共有することができた。道具を数種類準備したことで、一つの方法(一人の思い)だけではなく、違う方法(相手の思い)があることに気づき、また組み合わせるなど、展開を広げていくことができた。

・赤いバケツにおたまじゃくしを数匹入れた時、事件が起こった。途中から来たD君が赤いバケツに入ったおたまじゃくしを水道に流してしまった。D君はおたまじゃくしが入っているとは知らず、良かれと思いバケツの水を捨てた。それを見たB君とCさんはD君を責めていた。

B君「何で捨てるの!?おたまじゃくしが流れちゃったよ」

Cさん「おたまじゃくし可哀想...」

しかしそれを聞いていたEさんがD君をかばっていた。

Eさん「D君は知らなかったんだよ。おたまじゃくしが入っているって教えてあげれば良かったのに」

Eさんの一言によりB君もCさんもD君を責めることをやめ、責めたことを謝っていた。おたまじゃくしはまだ虫かごに数匹残っていたので、部屋を綺麗にする作業が再開された。そしてD君も一緒になって虫かごを洗う姿が見られた。

### 《教師の気づき》

少しの勘違いでD君は責められてしまった。D君は“おたまじゃくしのために手伝ってあげたい”という気持ちで輪に入ったはずである。D君のおたまじゃくしの思う気持ちはみんなと同じだという事を代弁しようと思ったが、少しの間見守ることにした。すると様子を見ていたEさんがD君の気持ちを受け止めながらしっかりと代弁してくれた。

### 環境、保育の援助

子供達の話し合う様子を見守りつつ、話が滞っている時には「おたまじゃくしも臭い部屋は嫌かもね」等と声を掛けた。

部屋が綺麗になつたら早くカエルになるかなぁ...

いっぱい汚れてるね

### 【振り返り】

今回図鑑を見て調べる姿は見られたが、図鑑だけでは知りえないことがあるのだと知った。そこで地域の方との交流などがあれば質問をして知ることができたのではないかと感じた。現在自園は地域との関わりが少ない。関わる機会が増えることで地域に親しみを持ち、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断することができるようになるのではないかと思った。

- ・泥を変えるかどうか話合う姿が見られた。  
B君「泥は前の泥を使えばいいよ」  
Cさん「新しい泥がいいと思う。だってこの泥臭いよ」  
D君「確かに臭いね。でもおたまじゃくしには臭い泥の方がいいのかも」
- ・意見が分かれたが話し合いをしながらおたまじゃくしにとってどれが一番良いのかを考え、結果新しい泥に変えることになった。
- ・初めは3人でしていたことが次第に増えていき最後には10人程で部屋を綺麗にしていた。

### 考察

部屋を綺麗にする中でトラブルや、意見の違いがあった。しかし今回の経験があったおかげで、自分の考えだけでなく相手の考えも受け入れながら話を進められるようになってきているように感じる。またおたまじゃくしを思う気持ちも大切にしながら、友達と考えを共有する楽しさを知ることができた。自分で考えても分からない時に、友達に聞くことで自分の知らない、思いつかない考えがあるということを感じたのではないだろうか。

8月1日

【場面 4-1 「足が生えてきた～」】

・部屋を綺麗にして1週間程して、A君があることに気が付く。

A君「あっ！おたまじゃくしに足が生えてる！！  
みんな見て！おたまじゃくしに足が生えてるよ」

それを聞いた他の子もおたまじゃくしに足が生えているのを見つけた。

B君「本当だ！足から生えるんだね。僕は手が先かと思っただよ」

どこからがカエルなのか、手が先に生えるのか、それともしっぽが先になるのか、子供達の疑問が多くでた会話だった。

《教師の気づき》

今まで育てていた中で一番大きな成長（変化）が見られ子供達はとても喜んでいて。予想していたことと違う変化が起こり驚いていた。同時に自分達が育てたおたまじゃくしが成長したことで、足だけ生えているのを初めて見た子供達は感動し、絵に描いて他の子とも喜びを共有しようとしていた。

《教師の気づき》

- ・新しいことを知った子供達はさらなる気づき、疑問を感じるようになった。子供達の知りたいという意欲、好奇心が強くなってきたように感じた。
- ・気付いたことがあると、ほとんどの子が他の子と共有するようになっている。

環境、保育の援助

子供達の中で沢山の会話ができたので教師は近くにいなから、できるだけ子供達の視界に入らないよう見守っていた。

支援内容に基づいた実践に関する考察

●子供達の中で沢山の会話ができたので教師は近くにいなから、できるだけ子供達の視界に入らないよう見守っていた。



支援③

自分で予測したり、人とは違う自分の意見を表現したりと子供達同士で発見の喜びやわからない事へ思いを巡らせることを楽しんでいるようだった。子供達の中で疑問がうまれた時に教師が介入すると子供達は教師に答えを聞こうとし、自分達で調べたり、やってみようとする意欲を欠いてしまう。遠くで見守ることで関心や疑問を広げることにつながることもある。

足が生えたらもうカエルかな？

すごい足が生えてる！

次は手が生えるかな？  
それともしっぽがなくなるのかな？

まだカエルじゃないよ。  
だって手も生えてないし  
しっぽもまだあるよ

8月1日

【場面 4-2 「かえるってこんな感じ？」】

C君「なんかおたまじゃくしの頃より泳ぎ方下手くそだね」

A君「面白いから描こう」

普段絵を描くことが好きなA君は足だけ生えているおたまじゃくしを初めて見てそれを絵に描くことにした。そして描いた絵を掲示することにした。掲示することで他学年の子達も興味を持って足の生えたおたまじゃくしを探す姿が見られた。

【振り返り】

C君の発言の時に教師が「どんな風に泳いでるの？」と言葉を掛けたらおたまじゃくしの真似遊びが始まり、身体で表現する楽しさを感じられたのではないかと思った。

足に指があったよ！

足は生えたけど  
まだしっぽはあったよ

カエルになったら  
こんな感じかなあ

環境、保育の援助  
他学年の子も見やすいように描いた絵は廊下に掲示した。

《教師の気づき》

おたまじゃくしを育てる中で友達と共有する楽しさを知った子供達は言葉だけではなく、絵を描くことを通して思いを共有できることを知った。以降おたまじゃくしの成長を絵に描き、思いの共有と同時に記録として描いて残すようになった。

支援内容に基づいた実践に関する考察

●他学年の子も見やすいように描いた絵は廊下に掲示した。

支援③

前回の支援③（P10）と同様に廊下に掲示することであまり興味を示さなかった子が、おたまじゃくしの足が生えた事、おたまじゃくしは足から生えてくる事を知るきっかけとなり、これを機に関心が芽生える子もいた。

考察

目に見える成長（変化）が起きたことで生き物を育てることがより一層楽しくなった子供達。おたまじゃくしは目に見えて、動きがあり、変化もしていくことで子供達は常に関心を持って育てることができたのだと思った。それだけではなく、育てる中で子供達の気持ちにも大きな変化があり、知りたい、やってみたい、という思いが芽生え、そして育まれたことで観察を続けられた。

動く生き物

おたまじゃくしの成長

目に見える変化

子供のこころの声

楽しい・面白い  
もっと知りたい！  
次はどうなるの？

興味・関心の継続

8月17日

【場面5-1 「おたまじゃくし?カエル?」】

足が生えてからも子供達の観察は毎日続いた。

A君「あっ今度は手が生えてきてる」

B君「本当だ!手から生えてくるんだね」

Cさん「やっぱり私の言った通りだったね」

A君「これは今かえるなの?おたまじゃくしのなの?」

B君「んーと…おたまかえるかな」

子供達は「おたまかえる」が気に入ったのか他の子にもその名前を教えていた。それから3日程経ち、いよいよみんながよく知るカエルの姿に変わっていった。

《教師の気付き》

・自分で予想した通りしっぽがなくなる前に手が生えてきたおたまじゃくしを見てCさんはとても喜んでいました。

・どこからがおたまじゃくしでどこからがカエルなのか話をするうちに、どちらかを決めるのではなく自分達の中で新たな答えを導き出していた。子供達はしっぽの生えているカエルを不思議に感じながらも、変わらぬ愛情を持って接していた。

砂を沢山入れすぎると上から逃げちゃうから少しだけ入れよう!

おたまかえるかぁそれもアリだね!



A君「ねえ、カエルだけのお家作ってあげようよ」

Cさん「あっそうだね!おたまじゃくしとカエルのお家は違うお家だもんね」

場面1でおたまじゃくしについて調べている時、カエルも一緒に調べていたのでどんなお家を作れば良いかは知っていた。

A君「先生!虫かごより大きな入れ物ない?」

教師「いいのがあるよ」

教師は発泡スチロールの入れ物を子供達に提供した。

Cさん「じゃあまず砂入れようよ」

田んぼに行き泥を入れようとしたが水が張っており、どろどろで上手くつかめなかった。

B君「砂場の砂でもいいんじゃない!この前砂場にカエルがいたよ」

B君は砂場で遊んでいる時カエルがいたのを思い出し、砂場の砂でもカエルが生きていけるのだと予想した。

お家が完成するとすぐにカエルを入れてあげていた。

B君「ほら!ぴよこぴよこ飛んで嬉しそう」

Cさん「私が作ったプールにも入ってるよ!」

《教師の気付き》

・泥をスコップですくうという考えが教師の中ではあったが、子供達が自分達だけで話し合い、進めていたのであえて言葉は掛けずに子供達の思いを尊重した。

・今まで想像や調べた事をもとに育てていたが、B君は体験(見たもの)をもとに実践してみようという気持ちが見られた。

8月18日

【場面 5-2 「カエル食べられてる…」】

カエルの家を作った翌日にD君が田んぼでヤゴを捕ってきた。

D君「見てみて！ヤゴ！」

A君「これなんの幼虫？」

D君「ヤゴはトンボの幼虫だよ」

B君「そうなんだ！あっカエルと一緒に泳がせてみようよ」

D君「いいね！ヤゴと友達になれるかな」

ヤゴとカエルをおたまじゃくしが入った虫かごに入れた。

5分程観察を続けていると……カエルがヤゴに食べられてしまっ、その瞬間を子供達は見ていた。

D君「ええ———！食べられた———！」

A君「……ヤゴってカエル食べるの？」

B君「すごい…カエル食べられてる……」

子供達はカエルが食べられている姿をじっと観察していた。

《教師の気付き》

- ・B君はカエルが一匹しかいないのを見て友達を作ってあげたい、カエルを思う気持ちがあつての発言だと感じた。
- ・子供達はヤゴに食べられているカエルを助けようとはしなかった。つまり、子供達のカエルに対する愛情よりも、初めてみた捕食の光景の方が興味を強く示したのだと思った。私自身その光景を初めて見て驚きと同時に興味があり、子供達にどのように言葉をかければ良いかわからず、ただ見守るばかりであった。



カエル  
足だけに  
なったね……

カエルが食べられてるの  
初めて見た！

カエルって  
食べられるんだ

初めて見た  
すごい……

友達を作って  
あげよう

かわいそう……

色々な思いが混ざり  
合っていた子供達

《教師の気付き》

図鑑に載っていないものも食べるということに気付き、図鑑が答えではなく、試してみても分かることもあるのだと感じたのではないだろうか。この体験をした子達は以前に比べて様々な事でやってみようという気持ちが見られるようになってきている。



ヤゴはお肉を食べるのかもね！

図鑑に載ってないじゃん！

8月18日

【場面 5-3 「生きるために食べる」】

D君はすぐに図鑑を見てヤゴが何を食べるのか調べた。

D君「見て！ヤゴはメダカを食べるって書いてある。カエルを食べるって書いてないよ」

A君「図鑑にも載ってないものも食べるんだよ」

B君「カエル…ちょっと可哀相だけど、ヤゴも何か食べないと生きていけないもんね」

D君「僕達も魚食べてるしね」

自然の原理を肌で感じていた瞬間だった。

その後カエルのお家について話し合いをした。

A君「ヤゴと一緒に駄目だね」

B君「あとさ、蓋もつけないと違う虫が食べにくるかもよ」

話し合いで出た意見を D君は忘れないようにと紙に書いていた。

支援内容に基づいた実践に関する考察

●話し合いで出た意見を D君は忘れないようにと紙に書いていた。



支援①

場面1で書いた紙を色々な子が見ていたのを知っていた D君は話し合いの内容を紙に書く事にした。実際に書いたことにより今までの話し合いよりも話がスムーズに展開されていた。視覚的に話をする事で途中で話がそれることがなかった。

考察

以前から命について話をしたり絵本を読んだりして伝えてきたが、繰り返し話をしたから分かるというような問題でもなく、子供達が「命」についてどのように考えているのかは常々気になっている所でした。今回生き物が生き物を食べる姿を初めて見た子供達はヤゴと自分達を重ねているようだった。身近な生き物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、大切にしたい気持ちが育まれた経験だった。命を繋ぐためには何かを犠牲にしなくてはならない自然の原理を、感じる瞬間でもあった。

4. 今回の活動を振り返って

今回の事例で育った  
科学する心の木



## まとめ

おたまじゃくしと触れ合う中で子供達の心に変化があった。今までやってみようという気持ちがあり見られなかった子が、疑問に感じたことを自分なりに解決しようとする意欲が見られるようになった。また命は一つしかないことを肌で感じ、部屋にハエやクモが出てきた時でもできるだけつぶさないように外に逃がしてあげる姿も見られるようになった。

おたまじゃくしを育てる子供達はおたまじゃくしに育てられているのかなと感じることもあった。生き物を育てることで命の尊さを知り、不思議！どうして？すごい！という様々な感情が育まれた。子供達は知る喜びを知ってから、それを友達と共有するようになり、友達との絆も深まった。そして1人が共有し、また違う子が共有し、喜びがクラス全体へと広がり、おたまじゃくしとの繋がりが深まっていくように感じた。

様々な科学する心が育まれていくことに私自身喜びを感じ、これからも子供達の小さな発見や気付きを見逃さずに見守っていきたいと思う。

## 今後の課題・方向性

- ・図鑑では知りえないことを年配の方に聞いてみる等、地域と関われる体験を増やし、遊びに必要な情報を取り入れ、その情報を基に判断ができるようになったり、やってみようと思う気持ちを高めていきたい。
- ・土日の休みの間におたまじゃくしが弱ったりすることがあった。誰かが休みの間だけお家で育てる等、保護者（家庭）とも連携を取りながら、生き物と関われるようにしたい。
- ・虫かごは小さくて数人でしか同時に見ることはできなかった。もっと大きな入れ物を用意しておいたり、園庭に子供達と池を作ったりする等してみたい。
- ・生き物を育てる中で、異年齢と関われるような体験が多くできると、伝えあう力が育まれたり、もっと色々な考え方ができたりしたのではないかな。